産経新聞　連載 「朝河貫一関係」 コラム　記事　　記者　文化部編集委員　関厚夫

【次代への名言】

雨ニモマケズ編（8）

2011.5.9 03:53

■「願くは境遇をかこつを止めよ。人は境遇に支配せらるる如（ごと）き弱き者にあらず。古来の至人（しじん）は、皆悪しき境遇より出（い）でき」（朝河貫一）

現代と比較されることの多い幕末・維新期で、痛恨事の一つは、官軍と旧幕府軍や親幕派の奥羽越列藩同盟とが戦い、多くの血が流されたことだろう。

現在の福島県北部に位置した10万石の二本松藩もまた、この歴史の渦のなかに巻き込まれた。藩主・丹羽長国は迷った末、列藩同盟に加盟する。そして慶応4（1868）年7月（旧暦）、25人の隊員の過半が戦死した「二本松少年隊」をはじめとする数々の悲劇とともに、二本松城は火炎と猛煙に包まれ、落城する。降伏した二本松藩は5万石に減封され、3年後の廃藩置県を迎える。

その2年後、旧藩の砲術指南を務めた朝河家に長男が生まれた。貫一である。

官軍からすれば「白河（福島県南部の関所）以北は一山（ひとやま）百文」の時代。それでも彼は東京専門学校（後の早稲田大学）文学科を首席で卒業し、勝海舟や大隈重信らの支援で米国に留学。そして、屈指の名門エール大学で教鞭（きょうべん）をとる一方、日本と第二の故郷・米国に対して、祖国愛と憂国、警世のことばを発し続ける。

《意志と行動あるのみです。私たちがいま直面していることを打開するために必要なのは、不屈の意志と、それを実行に移すためのよい手段なのです》

朝河の一生を象徴する一文だ。本日からしばらく、そんな彼という人とことばを追う。（文化部編集委員　関厚夫）

【次代への名言】雨ニモマケズ編（9）

2011.5.10 03:11

■「過去も現在も未来も私の一生は、一大詩歌（ポエトリー）に御座候（ござそうろう）」（朝河貫一）

「西欧の人がこんなことを言っています。『人間というものはひとたび志を立てたならば、その志を実現するか、あるいは未完のまま最後を迎えるか、いずれにせよ決して歩みをとめるべからず』。私のような後進にとって実に片時も忘れてはならない金言であります」

のちに日本人として初めて米国屈指の名門・エール大学で教授として迎えられる、祖国愛と警世の歴史家、朝河貫一が15歳、福島県尋常中学校時代にしたためた手紙の一文である。明治22（1889）年、秋のことだった。

「偉くなろうなどとは思いません。わが身のことなどは忘れております。ただ清くなりたくあります」

この一文は、それから5年後のもの。朝河の父、正澄は東北の旧二本松藩士で維新後、小学校教員となった。最初、父はそんな子が同じ教員となることを望み、次に医学の道に進むことを望んだ。

が、《欲するところは文学にあらず、法律にあらず、政治も適せず、工農も能（あた）はず、医と兵とは最も遠し。ただ一途あるのみ》とつづった貫一が最初に志したのは、意外にも《商業是なり》だった。

「国に益をもたらし、同時に自分を利する両全の道だからだ。米国の有力な実業家は視点が遠大で、見どころがある」

その理由である。貫一が見込んだ新興国家・米国はのちに第二の故郷となる。（文化部編集委員　関厚夫）

【次代への名言】

雨ニモマケズ編（10）

2011.5.11 03:02

■「我身（わがみ）と天地の何のかゝは（関わ）りあるや、人は何ぞ、如何（いか）にせばよきぞ。之（これ）ほどに実地の問題はなく、実地の根本に御座候（ござそうろう）」（朝河貫一）

明治25（1892）年、のちに日米両国で「屈さず、たゆまず」を体現する歴史家となる朝河貫一は、福島県尋常中学校を首席で卒業すると、東京専門学校（後の早稲田大学）の文学科に進んだ。

このころ、すでに抱いていた米国留学の夢をかなえるための第一歩。一方で、得意の英語力を駆使した翻訳業を頼りに授業料をまかなう苦学だった。

ここで上京後の朝河にまつわるエピソードを二つ三つ、紹介したい。

入学の前後、朝河は、福島県議会が、母校で英国人教師の代わりに日本人教師を採用しようとしていることを知った。彼は議会に堂々とした反対の建白書を送った。そのなかに、英語を英米人から習わないのは「まるで吉田松陰先生の品性を、高杉晋作や品川弥二郎、野村靖といった決して品行方正ではない、松陰先生の弟子たちから学ぼうとするものだ」などと論じる痛快な一文がある。

そして“大学生活”の2年目、朝河はキリスト教に入信する。が、冒頭の大問題と格闘する彼は信仰生活から満足が得られず、友人にこうしたためている。

「『人は何ぞ』を一生の研究問題と相定申（あいさだめもうし）候。これを解せずして斃（たお）れてもなお光栄。（中略）私は孔子にも基督（キリスト）にも釈迦（しゃか）にも失望仕（つかまつり）候。人間円満の相は此（この）人々に尽きしにあらず。もし尽きたりとせば、人はもはや進化の頂に達したことになり候」（文化部編集委員　関厚夫）

【次代への名言】

雨ニモマケズ編（11）

2011.5.12 03:38

■「恋愛は余の救主（すくいぬし）なり、余を導ける天使なり」（朝河貫一）

明治28（1895）年春。日本は日清戦争の勝利にわいたが、独仏露の三国干渉によって、中国・遼東半島の割譲が無に帰し、国民は臥薪嘗胆（がしんしょうたん）を誓う。東京専門学校（後の早稲田大学）文学科を首席で卒業した福島県出身の朝河貫一は、この年の師走、留学先の米国に向かった。以降、彼は世界的な歴史家、そして日米両国に対する警世家への道を歩む。

その渡米直前のことだ。

「今や生きることは難しく、死ぬことはかえってたやすい。しかし、たやすい死を捨てて、難しい生の方を選択せねばならない。ただただ死するなかれ」

朝河はこうつづっている。あて先は「いとこに嫁いだ女性」とされるが、名前は伝えられていない。ただ、朝河は、この女性を熱愛し、それを知ったこの女性はすでに子供があるにもかかわらず、命を絶ってでも朝河と結ばれようと考えていたことが文面からうかがえる。

同じころ、恋愛に悩み、やはり死を思った故郷の友人がいた。朝河はこの友人にも「断じて死すべからず」と説き、こう書き送った。「私は過去一年、恋愛から本当に教えられた。恋愛は私を絶え間なく進歩させ、懐疑させ、堅固にした。恋愛は複雑にしてかつ厳然と迫る大矛盾だ。これを解けば道は見えるはずだ」

冒頭は、そんな朝河が、2つの手紙のなかで到達した結論である。（文化部編集委員　関厚夫）

【次代への名言】

雨ニモマケズ編（12）

2011.5.13 03:08

■「外国に在（あ）る時は一刻も日本を忘るゝ能（あた）はず、日本の誉（ほまれ）と恥とを悉（ことごと）く一身に負ひ候」（朝河貫一）

東北・福島県出身で、のちに世界的な歴史家となる朝河貫一は1896（明治29）年正月、米北部ニューハンプシャー州の名門・ダートマス大学に入学した。

待望がかなった。が、朝河は貧しかった。東京専門学校（後の早稲田大学）文学科首席の成績と人物を見込んだ学長が授業料と寄宿舎費を免除（朝河は同等の金額を後年、返済している）し、勝海舟や大隈重信らのそうそうたる面々が渡航費（一般家庭の年収にも相当する額だった）を援助してくれた賜物（たまもの）だった。

《当地の書生（学生）は中々天下国家などと騒がずして正確に素直に徐々成長し行く趣あり》

朝河の支援者の一人、徳富蘇峰が主宰していた『国民新聞』に「形影生」の筆名で掲載された、朝河の“米国通信”の一文（冒頭も）である。『国民新聞』は当時の主要日刊紙で、朝河の寄稿は時に1面トップを飾る扱いだった。台頭しつつある大国・米国に対する関心が、いかに高かったかがわかる。

逆もまた真なりーだった。同じ年の春、朝河はこんなふうに報じている。

「日本の急激の進歩は如何（いか）なる理由からか。日本は未来の世界史の上に如何なる位置と責任とを有するのかー。これ皆米人の聞かんとするところ、邦人の言わんとするところ。でも、彼（米人）充分に聞くを得ず、我充分に言うを得ず」（文化部編集委員　関厚夫）

次代への名言】

雨ニモマケズ編（13）

2011.5.14 03:04

■「個人の間には忠告あり、扶助あれども、国家の道は自ら諫（いさ）め、自ら助くるの外あらず」（朝河貫一『日本の対外方針』）

「人情について古今東西の差はなく、ただその進歩の種類と程度とを異にするのみです。日本のことは大抵、諸新聞にて承知しています。東洋における西洋諸国の動静を一々熟読しております」

1898（明治31）年、故郷・福島の親友に送った、のちの世界的歴史家、朝河貫一の手紙の一節だ。米国に留学中の朝河の関心は「世界の中の日本」、そして「自分はいま何ができるか」に向けられていた。この手紙の中には、「日本とロシアとの将来についての長文を一編、日本に寄稿いたしました」とある。

日本の勝利におわった日清戦争と、武力をちらつかせて戦果の一部放棄を強要した独仏露による三国干渉は3年前のこと。以降、ロシアの南下の野心は明白だった。日露戦争は不可避ーと考えた朝河の寄稿は、「日本の対外方針」として、知己の徳富蘇峰が主宰する有力総合雑誌『国民之友』に掲載された。

「退けば国家の存在を危うくし、進めば日に日に困難に近づく」

朝河がみた当時の日本をとりまく環境である。彼は、現状を打破するために10年後を見据えて国家の品格を高め、日本人が「正義進歩の大国民」として世界の支持を得る道を歩むことを提言する。

が、時代はその時間を与えなかった。1904年、日露戦争が勃発。そのとき朝河は、故国のために再び筆を執る。（文化部編集委員　関厚夫）

【次代への名言】

雨ニモマケズ編（14）

2011.5.15 03:14

■「もし日本が勝ったならば、東洋には永続的な平和が訪れ、あらゆる面における向上が人類の三分の一に対してもたらされるであろう」（朝河貫一『日露衝突』）

《この闘争はまさに新・旧という2つの文明による壮大な戦いである。ロシアは旧文明を、日本は新文明を代表する》

母校の米ダートマス大学講師として世界的な歴史家へと歩みはじめていた1904（明治37）年11月、福島県出身の朝河貫一は、いくつかの論文をまとめ、英文の著書『日露衝突』を発表した。日露戦争の勃発は同じ年の2月。上の引用はその性格を看破した一文である。

朝河はこの著作について《人間として可能な限り客観的かつ不偏不党》《純粋であり、真である学者の態度をとった》と回想している。ために《批評家たちは多くの場合、驚き、わたしが感情を抑え、公平であるために多大の努力を払ったと考えた》が、《私からすれば、自らの主義を裏切り、学者としてではなく、愛国者としてこの本を書く方が、多大な努力を払う仕事だった》という。

それゆえ、この著書は米国の識者が注目するところとなった。冒頭は、日本が勝利をおさめたさいの展望。ではもし、《満州や韓国におけるその経済的関心は、これらのアジア地域における貿易や移住という、待ったなしの必要性というよりも、膨張する偉大な帝国の栄誉のためである》というロシアが勝ったならばどうなるか。朝河はつづっている。

《韓国と満州だけでなく、モンゴルもロシアに併合されるか、その保護国となるであろう》（文化部編集委員　関厚夫）

【次代への名言】

雨ニモマケズ編（15）

2011.5.16 03:14

■「真理というものは、たまたま出てきた2、3の意見の中間にあるのではなく、まったく別のところにあるのでしょう」（朝河貫一）

1905（明治38）年8月、米北東部のポーツマスで日露講和会議が開かれたとき、福島県出身の歴史家、朝河貫一は現場に赴いた。講師を務めるダートマス大学の学長が派遣したのだ、という。

講和条約は9月5日に調印された。樺太の南半分は割譲されるが、賠償金なしーの内容に、暴徒が外務省や警察署を襲う「日比谷焼き打ち事件」が起きる。

それから約2カ月後、妙な後日談が東京朝日新聞に掲載された。条約交渉中、朝河が「日々外人に奇怪なる日本の不利益」を吹聴していた、というのだ。

「当時、樺太の北半分をロシアが買い取る恰好（かっこう）で実費（賠償金ではない）を支払うという案があった。『日露とも国内で大反対に遭うだろうが、この線で妥結すべし』とある米国紙に話したら、憶測と誤解を重ねて報道されてしまった」

朝河は知人にあてた手紙でこんなことを訴えながらも、記している。「でも、なぜそう報道されたかを省察するのも私の歴史研究法上、有意義だと思います」

筆者は朝河の報道被害に当時の有力新聞社の暗闘をみる。東京朝日は条約に批判的だった一方、朝河は焼き打ちの対象にもなった賛成派の国民新聞を主宰する徳富蘇峰と親しかった。朝河批判の記事は「講和余聞　二個の怪しむべき人物」の後半分。前半部の批判の矛先は、国民新聞の特約通信員にむけられている。（文化部編集委員　関厚夫）

【次代への名言】

雨ニモマケズ編（16）

2011.5.17 03:21

■「我等（われら）は世に生れたる以上は、世に対する義あり。処世の決断は高き義心に依るの外なく候」（朝河貫一）

日露戦争が終結した翌年の1906（明治39）年2月、福島県出身の歴史家、朝河貫一は10年ぶりに故国の土を踏んだ。米国の名門・エール大学と米国議会図書館から依頼された日本関係図

書の収集、それに最愛の妻、ミリアムを得たことを父、正澄に報告するためだった。

朝河は米国で生きてゆくことを決意していた。一つには、帰国しても父を養うだけの職がないという経済的な理由。だが何より、「日本の公益のため」だった。

「従来欧米人が歴史の主役だったが、今や日本が東洋の精神を消化し、西洋の精神をも研究して主役となりつつある。これは史上の一大現象であり、欧米と日本との関係は重大な研究問題だ」

米国移住を促す恩師のことばである。朝河は手紙で父に訴えている。「貫一は目に見えぬ微細ながらも、日本と人類の統一進歩との為（ため）に決心するに至り候」

冒頭の一文も父にあてた別の手紙にある。朝河は一人子だったが、父子の情よりも義（公益）を優先した。筆者はそこに、武士道の伝統をみる。朝河は後年、武士道に関する論文でつづっている。

《私（わたくし）は必ず公に服した。負傷、または瀕死（ひんし）の父は、永遠の別離という苦痛のなかで『自分を捨てて主君のもとにはせ参じよ』と子に言いつけるのが常だった》

武家出身の父はそんな息子の理解者だった。が、再会の喜びもつかの間、正澄は急死する。（文化部編集委員　関厚夫）

【次代への名言】

雨ニモマケズ編（17）

2011.5.18 03:17

■「武士道は日本国民が父祖より伝えたる至宝にして、他国民の得んと欲して得難く、今日に及（およ）びて新たにこれを養成すること能（あた）わず」（朝河貫一『日本の禍機』）

『日本の禍機』は、福島県出身の世界的歴史家、朝河貫一の主著。1909（明治42）年、日露戦争後の日本のあり方をつづった警鐘の書であり、祖国愛の書である。そのなかで「（近代日本の）愛国心に影響することの深きは勿論なり」と述べられている、武士道に対する朝河の考えを少し記してみたい。

《武士道とは、その名前が示すように本質的には武人の行動の善悪をさだめる倫理規範のことであった》

朝河が武士道についてつづった論文の一節である。彼は武士道のルーツは、天皇制がはじまったばかりのころの古代日本の「真に明るい勇気と忠誠心にある」と説く。そして「神道からは良心のあり方と両親に対する自然な感謝の情、仏教からは人間の運命についての静思の習慣を、そして儒教からは孝と忠の徳を日本的に消化した形で授かった」とする。

また、徳川幕府による260年の治世の間に、庶民のなかにも武士道は浸透していった。そして明治維新を経て、「武士道は今日、生まれ変わった。その精神は一つの階級だけでなく、日本国中で共有され、封建領土内ではなく、日本国民と天皇が共有する目標となった。それは日本帝国の存在維持、そして極東地域の平和と発展に貢献する義務である」。

そんな日本の武士道がいま、試されているのだ、と『日本の禍機』はいう。（文化部編集委員　関厚夫）

【次代への名言】

雨ニモマケズ編（18）

2011.5.19 03:34

■「今日、日本の要するところは実に反省力ある愛国心なり」（朝河貫一『日本の禍機』）

福島県出身の世界的歴史家、朝河貫一は1909（明治42）年の著書『日本の禍機』で、武士道は「父祖より伝えたる至宝」であり、日本の愛国心の源であると論じた。そして近代における武士道を考えるうえで最も重要な“4元素”を挙げた。すなわち、（1）義に勇むこと（2）堅固の意志（3）自重、公平、抑制、礼譲、同情等の諸徳（4）静寂、思慮、反省－である。

朝河によると、日清、日露戦争では武士道（愛国心）は「（1）と（2）の変形であり、それで事足りた」。が、今後は（3）と（4）、つまり、国として「他国に対して公平の態度をとり、自国に対しては一時の国利と百年の国害とを見きわめ、国家と人類全体との関係に高明な考えをもつこと」が求められている、と訴える。

日露戦争の結果、日本は中国東北部の満州に進出した。以来、「中国本土に絶えず起こる旧式の外交問題は、世界にほとんど何等の興味を与えないけれど、満州における日本のいわゆる私曲は、微細のことすらただちに欧米の隅々まで喧伝（けんでん）され」た。朝河の在住する米国でも、かつて高かった日本の声望は失墜した。

現代の日本にとっても人ごとではないのは、朝河によればこうした事態にもかかわらず、「日本側の説明はほとんど皆無にして、政府の弁明があっても極めて概括的にして局外者を服する能わず」。

『禍機』は、憂国と愛国ゆえの書であった。（文化部編集委員　関厚夫）

【次代への名言】

雨ニモマケズ編（19）

2011.5.20 03:45

■「七世紀における天皇の地位復活は、十九世紀における明治維新のインスピレーションであった」（朝河貫一『大化改新』）

本日は、福島県が生んだ世界的な歴史家、朝河貫一がどんな天皇観を抱いていたかについて記してみたい。

《7世紀以前、国の組織が部族レベルであり、天皇がすべての部族の長であったとき、天皇は人民に対し、暴君ではなく父親のような精神で接し、人民の側にもまた、天皇に対して実子のような感情が色濃く宿った。この父子としての両者の感情は（中略）過去のどの時代よりも、現在において最も顕著である》

明治と大正の端境の年である1912年、朝河が英文の論文に記した一節だ。冒頭と、次に引用する一節は、その10年前、彼がエール大学で博士号を取得した論文『大化改新』（原題「日本における初期制度の生成－645年の改革の研究論文」）からのものである。

《国家組織の変革に関する限り、大化の改新は、天皇自身がそれを実行しなかったならば、ほと

んど革命といえる。（中略）おそらく、史上初めて、日本人は国家というものを理解したのだ》

そして明治維新によって、天皇と国家との間のみぞが取り払われた結果、国民意識が目覚め、「改新」は完成する。朝河は、日本という国の理想像を明治にみた。彼は別の論文に記している。

《明治天皇の寛容や献身、自制、そして旺盛な生命力は、彼が君臨し、愛した国民の歴史的な精神性を反映したものであった》（文化部編集委員　関厚夫）

【次代への名言】

雨ニモマケズ編（20）

2011.5.21 03:19

■「米国は事ある毎に新面目を見せられ候様にて何分難解の国と存（ぞんじ）候」（朝河貫一）

1917（大正6）年夏、旧知の徳富蘇峰にあてた一文である。それゆえ、といってよいと思う。福島県出身の世界的歴史家、朝河貫一は幾度も「米国とは」というテーマに取り組み、著作や手紙のなかでその結果を故国に報告している。

「米人は概して国際的知識及び趣味乏しき短所あり候へども、平和正義を好む長所あり候（此（こ）の点は充分（じゅうぶん）に日本に知られず、又利用されざる様（よう）に感ぜられ候）」「米国民は直截（ちょくせつ）の明言を喜び候。淡白（たんぱく）ならんことを要し候。あまり彫琢（ちょうたく）したる辞令は効果少かるべく候。説明に十倍の効果あるは日本今後の実際の挙動に在り」

こちらはともに、1914年8月、当時の首相で母校・早稲田大学の創設者、大隈重信にあてた書簡の下書きにある。

以前、その内容を紹介した朝河の主著『日本の禍機』でも、日米関係は中心テーマの一つだった。このときの朝河は、悲観論と楽観論の間をいきつ戻りつしているという観がある。象徴的なのがその「あとがき」だ。朝河は、出版の直前に結ばれ、日米の協調と中国と太平洋における現状維持をうたった「高平ールート協定」に多大な期待と賛意を表しながらもこう結んでいる。

「もしこの協定によって日本の国益が損なわれると考える“愛国者”が多数を占めるならば、日本の禍機は減少するどころか、一層増加することになろう」（文化部編集委員　関厚夫）

【次代への名言】

雨ニモマケズ編（21）

2011.5.22 03:00

■「小生は記者、講演者、通俗教授等として立たず、日本の学問を世に向ひて代表する程の純の学者として立たんことを目的といたし候」（朝河貫一）

《私への提案とは、今の肩書と地位はこれまで通りだが、給料は半分になるーといったものです。これから一年のうちに状況は好転するかもしれないが、確約することはできないそうです》

1921（大正10）年、福島県出身の世界的歴史家、朝河貫一は米国の知人にそんなふうにした

ためている。

当時、朝河が日本文化史の助教授を務めていた米国の名門・エール大学は大幅な合理化を迫られていた。われわれにとっても身につまされるが、朝河に対する大学側の提案は厳しいものだった。それでも、「大学側は自分の学問的業績を評価してくれているし、苦しい台所事情でも何とか引きとめようとしている」と感じた彼は当面、とどまることを決める。

実はこのころ朝河には、母校の早稲田大学の重鎮、坪内逍遙を通じて、帰国したうえで早大で教鞭（きょうべん）をとる、という話も進められていた。「もし早大にて希望とあり、純正の研究を重んじる態度で応じられるのであれば、私も余生を母校に捧（ささ）ぐるだけの義気なきにあらず候」。朝河は逍遙にそう書き送っている。

冒頭はそんな朝河の信念である。彼の努力と独創の才はその後も存分に発揮される。ただ惜しむらくは、彼の学術的な論文や著作は国際的には評価されたが、日本では注目されることが少なく、再び故国の土を踏むことも、かなわなかったことだ。（文化部編集委員　関厚夫）

雨ニモマケズ編（22）

2011.5.23 03:33

■「日本もし文明世界の憎まれ者と相成（あいなり）候はば、日本の恃（たの）む所は自国の兵力の外あるまじく、其（そ）の負担は恐るべきものなるべく候」（朝河貫一）

1915（大正4）年1月初旬、米エール大学で教鞭（きょうべん）をとる福島県出身の世界的歴史家、朝河貫一は、首相、大隈重信にそんな私信を送った。

日本は前年、同盟国・英国の支援を理由に第一次世界大戦に参戦していた。また、朝河は知るよしもなかったろうが、このとき大隈内閣は、中国で排日運動が起こる原因となる対華二十一カ条要求を提出しようと準備していた。

朝河は、日本が国際的に孤立することを恐れていた。彼がこのころ、大隈に送った別の私信の下書きにはこんな一節がある。「世界は日本を新参者とみなしており、日本が非常に謙譲にふるまってもなお、『慢心』の評を免れることができません。日露戦争後、『日本は傲慢（ごうまん）』の評の広くて深きは実に驚くべきです」

「米国民の誤解」も顕著だった。米国は日本の動向を、第一次大戦が泥沼化する原因をつくったドイツに重ね合わせている－と朝河は感じていた。

「日本人とドイツ人は神話時代から境遇も性格も根本的に異なります。ただ明治維新以降は偶然にも事情相似たるものあるため、日本はドイツを模範としました。ゆえに軍事や政治、教育、生活などすべてにおいてドイツ流に深く感染していますが、これは自らを欺くものです」

朝河のこうした警告の声は、ヒトラーの台頭とともに、かき消されてゆく。（文化部編集委員　関厚夫）

【次代への名言】

雨ニモマケズ編（23）

2011.5.24 03:47

■「日本軍部の政綱は、日本史の指す方向にありと申すべき意義は遥（はるか）に乏しく、むしろ之（これ）に背馳（はいち）する或（ある）外国流儀の日本化と申すべく候」（朝河貫一）

福島県出身の世界的歴史家、朝河貫一の警世はいまなお示唆に富む。が、彼も人間である。誤りは避けられなかった。

「ニューヨーク・タイムズのワシントン通信は、常に一、二の事実らしき点の周囲に十百の誤解と故意の曲解とを加えて事実のように書き、紙面化のさいには一層、悪意のある見出しを掲げて本文を読まない多数の人を導き候」。1921（大正10）年夏、朝河はこんな内容の書簡を、日本外務省の高官に送っている。

朝河によれば、そんな米国マスコミの日本批判は、《もはや米国記者の智識の欠乏、或（あるい）は日本に対する誤解及嫉妬》といったレベルを超えていた。ちょうど彼が米エール大学にとどまるべきか、帰国するべきかを決めかねていたころのこと。私生活上の迷いが判断をくもらせたのだろうか、彼は同じ書簡で、「日本たたき」を当時流布されていたユダヤ人陰謀（黒幕）説に結びつけて論じている。

だが、朝河は決して反ユダヤ主義者ではなかったことを強調しておきたい。

「両者とも得るところはなく、失うものは莫大（ばくだい）となりましょう」。1936（昭和11）年、日本が反ユダヤ主義のナチス・ドイツと防共協定を結んださいの指摘である。以降、朝河はナチスを批判し、その影響が日本に波及することに警告を発し続けた。冒頭はその3年前の一文。「或（ある）外国」とはドイツのことである。（文化部編集委員　関厚夫）

【次代への名言】

雨ニモマケズ編（24）

2011.5.25 03:21

■「ヒトラーは今日の世界の不幸の直接、中心唯一の源であり、その来るべき彼の悲劇は自ら招く所であるに相違ありません」（朝河貫一）

《彼はまだ英雄である間に、戦争で死んでしまう方がよいかもしれません。しかし、彼はドイツ国民に対してあまりに強い責任感をもっているので、わざわざ自国民に災厄をもたらすようなことはしないと私は信じております》

「彼」とはヒトラーのこと。1939（昭和14）年7月下旬、福島県出身で米在住の世界的歴史家、朝河貫一が米国の知人にあてた手紙（下書き）の一節だ。

朝河は、民主主義に対するヒトラーの危険性をすでに見抜いていた。しかし、このときまで、綱渡りながら武力を用いずに次々とドイツに外交上の勝利をもたらしていたヒトラーに国家指導者としていちるの望みを託していたのだろう。

この手紙から1カ月半後、ドイツはソ連と共謀し、ポーランドに侵攻、英仏はドイツに宣戦を布告した。

第二次世界大戦の勃発である。以降、朝河はヒトラーとナチス・ドイツに対する厳格で激越な弾劾者となった。

《自暴自棄の終幕を演じて自国を破滅し他民を殺す罪人として、遂（つい）には恥辱窮（きわま）りなき屈服となり、自殺でも試み得るのみではありますまいか》

冒頭とともに、大戦勃発直後に日本の知人に送った手紙の一文である。当時、だれも想像できなかった「6年後」を正確に予想している。と同時にこれらは、ドイツに急接近していた故国への警告でもあった。（文化部編集委員　関厚夫）

【次代への名言】

雨ニモマケズ編（25）

2011.5.26 02:51

■「日本が愈々（いよいよ）独伊と軍事同盟を十年間締結致（いたし）候事は、有史以来の大誤失と存（ぞんじ）候」（朝河貫一）

「独伊と軍事同盟」とは、1940（昭和15）年9月に調印された日独伊三国同盟のことである。福島県出身で米在住の世界的歴史家、朝河貫一が祖国の知人にあてた手紙の一文だ。

《全体に日本人は未（いま）だ自由主義の国民の心理を真に理会（解）して居（お）りませぬ。（中略）既に独逸（ドイツ）は此（この）不理会の故に、自意に反して英仏を敵として戦はねばならぬことになりました》

同じ年の初め、朝河は、日本女子大学校校長の井上秀にそう書き送っている。ソ連と共謀したドイツがポーランドに侵攻し、第二次世界大戦が勃発したのは前年の9月。祖国・日本は、彼の思いとは裏腹に悲劇への道をたどっていた。

「日本は独・伊・露等に倣（なら）ひて力を信仰し、他人を理会せず、卑劣を行ひてその卑しき事を悟らざるものに外ならず」

こちらは1940年夏、のちに日米開戦の回避と終戦工作に努めた政治学者、高木八尺（やさか）への手紙だ。

このころ、ナチス・ドイツは欧州大陸で連戦連勝、英国をも占領しかねない勢いだった。だが、朝河はつづっている。

《歴史というものは、歴史を自分の意のままにおこうと狂奔する人間や国家が持つ最高の知恵や努力よりも、限りなく複雑、精妙、強大なものです。歴史は人知れず、しかし確実に、そんな者どもを葬り去り、彼らの所業を粉砕します》（文化部編集委員　関厚夫）

【次代への名言】

雨ニモマケズ編（26）

2011.5.27 02:40

■「日本国民は過去の国難のさい、驚くべき力を発揮して自らの限界を超越し、大改革のなたをふるい、禍（わざわい）を転じて福となしてきた」（朝河貫一）

1941（昭和16）年6月、独ソ不可侵条約を一方的に破棄し、ナチス・ドイツはソ連侵攻を開始した。欧州戦線の初期と同様、独軍は破竹の進撃で、10月初旬にはソ連の首都・モスクワの攻防戦がはじまった。その直後、福島県出身で米在住の世界的史家、朝河貫一は、政界の重鎮、金子堅太郎に書き送っている。

「たとえ露にて国都（モスクワのこと）を取りても、独の前進は一歩毎（ごと）に後日の敗北の種子を蒔（ま）き候」

この年の12月初め、ソ連軍の反撃によって独軍がモスクワ攻略をあきらめたことで「独軍の敗退」とし、同時期の日米開戦の愚を論じるむきがある。が、たとえ後世という“神の視点”にあっても、そう決めつけてはならないだろう。一つ指摘すれば、数々の攻防戦の末、ソ連戦線の独軍が崩壊するのは44年の夏以降である。それだけに41年10月時点での朝河の指摘は、きわめつきの卓見であった。

一方、冒頭は日米開戦の直前に米人の知人にあてた手紙にある。朝河の祖国愛がにじむ文章である。そして前述の手紙で金子には「維新前後の徳川慶喜以下、聡明（そうめい）な諸侯や志士が取った『公明正大』な方針」－大政奉還のような回天の決断であろう－を選択するよう促している。

朝河はただ提案するだけではなかった。日米開戦を阻止するため、自らルーズベルト米大統領に働きかける。（文化部編集委員　関厚夫）

◇

【次代への名言】

雨ニモマケズ編（27）

■「何故に日本の政府が度々変つて小人物が頻（しき）りに出没するやうになつたか。十年前に夢にも想ひ得なかつた由々しき国難は誰の過失であらうか」（朝河貫一）

昨今の内閣に対する叱責ではない。1940（昭和15）年1月、福島県出身で米在住の世界的歴史家、朝河貫一が戦後、3度にわたって組閣する鳩山一郎に送った手紙（下書き）の一文である。

《アジアとヨーロッパの国際問題に対する私の個人的な関心は深く、長きにわたるのですが、それは二次的関心です。私の本来の研究領域は中世です》（米国の知人への手紙）。しかし、日米が開戦しようとする一大国難のとき、朝河が研究室に閉じ籠もることはなかった。

《陛下よ、日本の国際親交国仲間への復帰のもたらす奇跡的な一般状況の変化を思い浮かべざるをえない。陛下の忠節な国民は、彼らには当然責任のない身心の重荷から解放されるであろうし、世界各国は不幸な間違いとしかいえない新旧の禍から救われるであろう》

朝河はこんな一節（阿部善雄氏訳）をもつ大統領親書案を作成し、米政府に提出した。彼にとって昭和天皇は、「改革を期待することができない軍閥たちを追放することのできる唯一の権力」（教え子への手紙）だった。ルーズベルト米大統領を動かし、昭和天皇に世界平和のための英断を促してもらう－。

そんな期待は裏切られた。大統領親書は作成されたが、邦訳が宮中に届けられたのは真珠湾攻撃の直前。またその内容も「私（朝河）の提案とは全く違う」ものだった。（文化部編集委員　関厚夫）

【次代への名言】

雨ニモマケズ編（28）

2011.5.29 02:27

■「その日の夕、昭和天皇はアジアのなかで最も悲しみにうちひしがれた人だったーとヒュー・バイアスは言っております」（朝河貫一）

バイアスは、ロンドン・タイムズの日本支局長を務めたこともある米国在住の英人ジャーナリスト。「その日」とは、1941（昭和16）年12月8日ー真珠湾攻撃による日米開戦の日である。福島県出身の世界的歴史家、朝河貫一が、米人の教え子にあてた一文である。

おなじ手紙のなかで、朝河はこうもつづっている。《私が夢見ていたことは起きませんでした。日本政府は天皇（の意思）を以前にもまして無慈悲に踏みにじっていたのです。（中略）今回の宣戦のかたちは、私に言わせれば、軍部の謀反人どもの不実、不忠のあらわれです》

朝河は、機会があるごとに、世界に対して天皇と天皇制が正しく理解されるよう努めてきた。ともすれば過去の欧州の専制君主と混同されることが多かったからだろう。第一次世界大戦前に彼が発表した論文に《日本の天皇は過去に専制君主であったことは一度もなく、将来的にそうなるであろうなどと想像するものは一人もいない》との記述がみえる。

だから、終戦に近づき、米国内で“戦後処理”が議論されはじめたとき、朝河は同僚のエール大学の教授に訴えた。

「自称・平和プランナーたちが天皇制の廃止を提案しているのは遺憾なことです。私は、日本における戦後の諸改革の完遂には天皇の承認と支持が不可欠であることを強調しておきたいと思います」（文化部編集委員　関厚夫）

【次代への名言】

雨ニモマケズ編（29）

2011.5.30 03:20

■「さまざまな国の人たちを知ることは、自国民をよりよく知るということなのです」（朝河貫一）

ここで改めて強調しておきたい。福島県出身の世界的歴史家、朝河貫一は、祖国・日本に対するのと同様、第二の故郷である米国に対しても、愛するがゆえの批判をおそれることはなかった。

「米国にはご承知の如く、古来、国家的自利主義の思潮あり」

第一次世界大戦中の1916（大正5）年、大正デモクラシー運動の一翼をになった政治学者、浮田和民にあてた手紙（下書き）の一文だ。《米国人には、根拠不十分にもかかわらず、大事だと思い込むと、不条理の域にまで突っ走ってしまいかねないところがあります》とは米人の友人につづった感想である。

《アメリカ人は謙譲の心に欠ける一方で、非常に寛大な心の持ち主である》

これは第二次大戦が終結する直前、別の米人の知人に指摘した一文。前者の欠点を憂う朝河は、米人の教え子に《米国人は、他国民やかつての敵たちの歴史や心情について思いやりの心で理解する必要があるでしょう。それは忍耐が求められ、骨の折れる仕事です。また、それまでの

考えや態度を完全に改めることさえありましょう》とつづっている。

さて次の一文は、そんな朝河が戦前に思い描いた理想の日米関係である。

《米国は日本の敵なりといふは狭き考（かんがえ）に候。敵にも味方にもあらず、何（いず）れも権利と義務とを有し、何れも元気ある隣り同志に候》（文化部編集委員　関厚夫）

【次代への名言】

雨ニモマケズ編（30）

2011.5.31 03:33

■「日本人は古来の危機毎（ごと）に、鮮明の反省を以（もっ）て過去の誤（あやまり）を惜しまず捨去り、将来の光明に向ふ」（朝河貫一）

《ドイツやイタリアに進駐した米軍将校は、現地で話をした人間みながみな、「戦時中は連合（英米）国軍支持だった」と自己申告し、それゆえの特別な配慮を乞（こ）う姿に慣れっこになっていました。ところが、日本人がそんなことを言うのを聞いた者は一人もいません。わが米国人の驚きようが目に浮かぶことでしょう》

終戦から1年が経過した1946（昭和21）年9月、福島県出身で米在住の世界的歴史家、朝河貫一は、そんな日本人の「潔い態度」を知らせる手紙を旧知の米人研究者から受け取った。

その翌年の晩秋、日本の知人に送った手紙のなかにある冒頭の一節が伝えるように、朝河の日本人に対する信頼はゆらがなかった。が、「ナチスよりも世界にとって大きな危険となる可能性がある」と看破したソ連が気がかりだった。だから、同じ手紙で訴えている。

「まずソ連及（およ）び日本内部の赤徒（共産主義者）の乗じ得る地盤を改めずば、将来の危険は覿面（てきめん）でありましょう。たとえば日本が自衛の警察力だになきように新憲法を造ったのは、ソ連の侵略、赤党の便乗を好んで招くに等しき愚策ゆえ、まず之（これ）を改正して自衛力を得ねばならぬ」

1948年夏、朝河は心臓まひで急死する。享年74。妻のミリアムを35年前に失って以来、伴侶を得られず、子供もない。過去と現在の祖国の研究にささげた生涯だった。（文化部編集委員　関厚夫）

2011-05-31 完結